

大漢和辞典の【断腸】の項で「晋の桓温が三峽を過ぎた時、其の従者が猿の子を捕らえた。母猿が之を慕って哀号し、追行すること百余支里、ついに悶死した。其の腹を割いて見るのに、腸が寸々に断ち切れていた」と説明するように、「世説新語」の以下の故事を踏まえる。

〔世説新語・黜免〕桓公入蜀、至三峽中。部伍中有得猿子者、其母縁岸哀號、行百餘里不去、遂跳上船、至便既絶、破視其腹中、腸皆寸寸斷、公聞之、怒、命黜其人。

## 補説②

○16句目「啼聲亂杜鵑」の「杜鵑」に込められている故事

松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店）の「杜鵑（子規・不如帰）」の項で次のような説明がある。

ホトトギス。長江の中流から上流にかけて、多く生息する鳥である。中国の文学に、この杜鵑（子規）が頻繁に詠まれるようになるのは、盛唐以後のことである。（中略）杜鵑は、この『芸文類聚』に採録されている。つまり杜鵑は、比較的遅れて詩文の題材となっていた鳥、ということになる。

杜鵑には、古い伝説がある。西晋、左思の「三都賦」のひとつ「蜀都賦」に付けられた旧注に、『蜀記』を引いて言う。「かつて杜宇なる人がいた。彼は、蜀を治めて望帝と号した。杜宇が死んだとき、子規に姿を変えた。子規とは、鳥の名である。蜀の人々は、子規の鳴く声を聞くと、皆口々に、望帝が来た、と囁いた。」この化鳥説話に依れば、杜鵑（子規）は、望帝の落ちぶれたなれの果て、ということになる。

（「IV漢詩を読むポイント」（用語）P 660～661）

この一文は、『文選』「蜀都賦」の「碧出葭弘之血、鳥生杜宇之魄」の注の一部